

## 3・奈良国立博物館の被災文化財等救援事業への取り組みについて

内藤 榮 奈良国立博物館 学芸部部长補佐 工芸考古室長

### 1. 参加の体制

当館の文化財レスキュー事業への参加は、主に次に三項目である。

#### 1-1 被災地への職員の派遣

文化財を扱うという業務の性格上、学芸部職員を派遣したが、被災地の仙台出身の写真技師が派遣を希望したため、車輛の運転、活動の撮影記録に従事させた。

#### 1-2 募金活動

平成23年度に開催された特別展、名品展（平常展）の会場出口に募金箱を設置した。その近辺にはレスキュー事業を紹介するパネルを掲示した。

#### 1-3 展覧会での事業の紹介

平成24年2月28日（火）～3月18日（日）にかけ、西新館において特集展示「東北の古瓦―泉官衙遺跡を中心に―」を開催した。本展は館藏品の中から被災地域で以前に発掘された古瓦を紹介する展覧会であり、直接事業を取り上げた内容ではないが、あわせて事業の紹介パネルを会場に展示した。

### 2. 経費の調達

参加費は募金の一部を用いたほか、財団法人仏教美術協会からの寄付50万円を使用した。

### 3. 具体的な作業内容

#### 3-1 岩戸晶子研究員の派遣

（6月20日～25日）

- ・ 6月20日  
仙台市博物館の現地本部にて打ち合わせ
- ・ 6月20日  
女川町マリナル女川展示室にて救援活動を行う。救出文化財を石巻市サン・ファン館に搬入。
- ・ 6月22日

鮎川町文化財収蔵庫において救援活動を行う。



鮎川町文化財収蔵庫での資料移動

- ・ 6月23日  
同
- ・ 6月24日  
同
- ・ 6月24日  
現地本部で活動報告。

#### 3-2 内藤榮部长補佐の派遣

（6月26日～7月1日）

- ・ 6月26日  
仙台入り



鮎川町体育館に集められた資料

・ 6月27日

仙台市博物館の現地本部にて打ち合わせ

・ 6月28日

鮎川町文化財収蔵庫において民具の移動作業を行う。移動先は同町体育館。300点ほどを移動。

・ 6月29日

鮎川町ホエールランドにおいて資料の搬出。搬出先は仙台市科学館と国立科学博物館（つくば市）。



梱包されたクジラの骨格標本

・ 6月30日

仙台市科学館において鮎川町ホエールランドからの移動資料の洗浄、倉庫への移動。



資料の洗浄作業

・ 7月1日

鮎川町体育館に保管中の民具を東北学院大学へ移動。鮎川町ホエールランドに積み残し資料がないかを確認し、帰途につく。

### 3-3 清水健研究員の派遣

(6月27日～7月6日)

・ 6月27日

仙台市博物館の現地本部にて打ち合わせ

・ 6月28日

現地本部業務を行う。瑞鳳殿、青葉城址、宮城県護国神社等の被災現場を視察。

・ 6月29日

宮城県亶理郡荒浜の個人宅において被災資料の搬出を行う。

・ 6月30日

終日、現地本部業務を行う。

・ 7月1日

同

・ 7月2日

亶理町郷土資料館にて水損文書の整理・処置、及び同町個人宅からの資料の搬出に業務。

・ 7月3日

終日、現地本部業務を行う。

・ 7月4日

同。夕刻、この週の事業予定について打ち合わせを行う。

・ 7月5日

終日、現地本部業務を行う。

・ 7月6日

亶理町郷土資料館にて水損文書の処理、整理を行った。

### 3-4 佐々木香輔技師の派遣

(7月6日～7月14日)

・ 7月6日

石巻文化センター2階収蔵庫において、被災文化財の写真記録、トラックによる搬出作業を行う。

・ 7月7日

同

・ 7月8日

同

・ 7月11日

同

・ 7月12日

同

・ 7月13日

同。亶理町の悠里館に残されていた被災文化財のトラックによる搬出作業を行う。

・ 7月14日

東北歴史博物館より東北大学まで被災文化財（瓦など）を移送する。

### 3-5 岩戸晶子研究員の派遣

(7月11日～16日)

- ・ 7月11日  
仙台市博物館の現地本部にて打ち合わせ
- ・ 7月12日  
石巻文化財センターの2階収蔵庫及び展示室から搬出された文化財のカビ除去作業を行う。
- ・ 7月13日  
亘理町郷土資料館において、被災文化財の状態確認と応急処置、水損資料の応急処置及び記録・撮影。
- ・ 7月14日  
東北歴史博物館において保管していた、石巻文化財センターの資料を東北大学に移送し、保管作業を行う。
- ・ 7月15日  
石巻文化財センターにおいて、展示室ほか文化財の応急処置、新たに発見された文化財の記録・救援準備、輸送下見を行う。その後、石巻市サン・ファン館に保管中の門脇小学校からの救出民具の計測を行う。
- ・ 7月15日  
現地本部において活動報告、引継作業を行い、帰途につく。

### 3-6 募金活動

(4月1日～平成24年3月31日)

西新館の特別展会場及び名品展(絵画・書跡・考古・工芸)会場の出口、及び仏像館の名品展(彫刻)会場出口に募金箱を設置した。義援金は公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団に送金し、一部を当館職員派遣に用いた。

### 3-7 特集展示「東北の古瓦―泉官衙遺跡を中心に―」の開催

(平成24年2月28日<火>～3月18日<日>)

当館には、戦前から戦後にかけて東北地方を中心に活躍した

歴史考古学者内藤政恒氏が収集した瓦コレクション【内藤コレクション】、内藤政恒氏とともに研究会に参加し、在野で瓦研究を続けていた原田良雄氏が収集した瓦コレクション【原田コレクション】が収蔵されている。平成22年度に当館は福島県の南相馬市博物館との間で「博物館所蔵の考古資料相互貸借事業」により所蔵品をお互いに貸借し相互展示を行った。この事業によって、内藤コレクション・原田コレクションのうち国史跡 泉官衙遺跡と周辺の関連遺跡から出土した瓦が南相馬市に初の里帰りを果たし、震災の5日前まで展示され、地元の方に紹介された。今回の震災では泉官衙遺跡の所在地も津波の被害を受けた。この展示では、内藤コレクションと原田コレクションを中心にこうした被害の大きかった地域に関連した出土品を展示し、あわせて文化財レスキュー事業についてパネル展示で紹介した。

## 4. 救援活動参加の成果と課題

文化財レスキュー事業に参加することで被災した文化施設の現状を目の当たりにして、文化財に携わる者として幾つかの教訓や問題点を得ることができた。

一つ目は博物館施設の災害への備えに対する姿勢である。津波の威力に抗うことは現状では不可能であるため、高台や地盤の良い場所に施設を建設すべきであると考えられる。そのためには、建物の耐震強化などハード面の補強のほか、倒れにくい展示ケースの設置及び簡易な免震装置の設置、展示室内における壁面などの転倒防止などが必要であると思った。また、資料の上に照明器具やパネル類、演示具などを置かないことなどの、学芸員の日常的な配慮が資料の被災を最小限に引き止めることを実感した。

二つ目は電気が止まった後の展示施設の脆さである。空調が止まることで水損資料以外にもカビが及び、展示室は劣悪な温度と湿度環境になっていた。今日、電動で開閉する展示ケース



展示会場風景



天井の照明器具がぶら下がる鮎川町ホエールランドの展示室

---

が多く採用されており、停電時の対応が必要であることを痛感した。

三つ目はわが国の先人たちが文化財を守り伝えてきた努力に対する畏敬の念である。わが国に古代、中世、近世、近代の文化財が数多く伝えられ、その中には発掘品ではない伝世品が数多く含まれている。これは世界的に見ても稀有なことであり、地震国日本においてこれほどまでに多くの伝世文化財を守り伝えることができたことは、先人の努力と知恵、そして文化に対する愛情に負うと思う。これは日本人として誇るべきことで、後世に守り伝えなければいけない精神であると感じた。

## **5. 委員会のあり方についての評価と指摘すべき問題点**

今回の事業が職員を派遣する館や団体の負担、あるいは参加者の個人負担、義援金に頼っており、国による被災文化財の保護・修復に対する予算を組んでおく必要がある。情報の共有が必要であると感じている。しかし、委員たちは献身的に業務に当たっており、また参加団体職員たちも本務の多忙な中過酷な肉体労働に従事している。彼らの活動は賞賛されるべきものである。

## **6. 震災時文化財レスキュー活動のあるべき形態（提言）**

被災文化財のうち指定文化財に関しては国の救助を受けることができたが、その他多くの未指定品はその管轄外とされている。そのため、義援金や寄付金などに頼らざるをえず、またレスキューに参加する人員も各博物館施設の裁量に任されている。どこまでを文化財として扱うかは難しい問題で、私自身もレスキューに従事しながら「これが文化財か？」と感じる品も扱ったが、時代や価値観が違えばそのような品も文化財たりうる可能性がある。先に日本人の文化を守り伝えた精神について触れたが、地域はもちろん国も主導して被災文化財を救済する体制を作るべきであると感じた。